

『執着系腹黒D部下』2000DL特典SS

「……んう」

橘は目を瞑ったまま、小さく身じろぎをした。カーテンの隙間から差す朝日が眩しい。

ふいに下半身に違和を感じ、寝ぼけていた意識が急速に覚醒していく。シーツをめくると、股の間に座り、自身の陰茎を咥えた彼女が現れた。

「はあ……ふふ、おはようございます」

橘は熱い吐息を漏らし、薄っすらと笑みを浮かべて彼女の頭を撫でた。相手は挨拶を返すように、じゅる……と派手な音を立てて昂りに吸い付いた。

どれほど前から刺激していたのだろうか、性器はすっかりと張り詰め、

勃起していた。

最初は下手だったフェラも、今ではすっかり手慣れたものだ。

教えたことをすぐに吸収していくので、躰けがいがあるな、と思う。

「んっ、上手……上手ですよ……はぁ」

髪をぐしゃぐしゃと乱していると、訴えかけるような瞳で彼女がこちらを見つめてくる。

「ん？」

と問うてみるが、どうして欲しいかは分かっている。

美味しそうにむしゃぶりついていたものから口を離すと、先端から唇の端まで透明な橋がかかった。

「……お願い、します」

彼女は目尻を下げ、とろりと蕩けた煽情的な表情で、股間に頬ずりをし、愛おしそうにキスをした。

その瞬間、ぞくりと快感が込み上げた。心の内を、仄暗くてぬるい液体が満たしていく愉悅。

彼女の頭を掴み、一気に喉奥まで突きいれると、低い声で相手は唸った。それでも構わず抽送を繰り返す。

「はあ……はっ……ん……はあ……どうですか先輩、気持ちいい？」

苦しいのだろう、生理的な涙を浮かべ、己を口いっぱいに入れ入れている彼女は可愛い。

ぽろぽろと瞳から雫が零れ始めると、興奮して、つい動きが激しくなってしまう。

（あー……泣いてる。可愛い、可愛いなあ）

「んう……はあ……ここ好きですもんね、はあ……んゝ気持ちいい♡」

張り出した部分で上顎の奥を擦り上げると、嬉しそうに喉で吸い付いてくる。

彼女はきゅっとシーツを握った。身体が力み、やがて全身が痙攣した。

「んっ……ふふ、イってるんですね」

普通であれば苦痛であろうこの行いも、今となっては絶頂するほどの快感を得てしまいうらしい。

（というか、俺がそうしてやったんだけど）

はじめは自慰と共にさせ、何度も何度も繰り返していくうちに、下半身の快感と口内の快感が結びつくようになる。

やがて口内だけでも心地よくなり、自らイラマチオをおねだりする程度には、お気に入りになったようだ。

心が満たされるなあ、と思う。己の手によって、日々更新され作り変えられるっていく肉体。

そういう事実の積み重ねによって、穏やかな気持ちで生活していく事が出来る。

「はっ、はあ……はあ……ん……ふ……先輩そろそろ出すよ……はあ」
思考が濁り始める。達したい、気持ち良くなりたいということしか考えられなくなる。

やがて脳内は目の前で強くフラッシュががたかれたかのように白く染まり、橘は彼女の口内で果てた。

「はあ……はっ……ふふ、先輩、あーんして」
犬のようにじっと待てをした相手は、放たれた精液を乗せた舌を差し出した。

しばしその様子を眺めていると、彼女は鼻息を荒くして潤んだ瞳で訴えかけるようにこちらを見つめてくる。

「はい、ごっくん」

ごくり。精子を嚥下する音が、あまりにもはっきりと鼓膜に響いた。

美味しそうに己の体液を飲みほした相手は、恍惚とした表情で下唇を舐

めた。

「うん、いい子いい子。ちゃんと待てができて、偉かったね」

柔らかい髪を撫でてやると、彼女は嬉しそうに目を細めた。

このままお互いを貪り合うようなセックスになだれ込みたいが、生憎今日は平日である。

胸元に光るピアスを、きゅっと引っ張ると、彼女は身を振り甘ったるい声をあげた。

「今日もいい子に、待っててくださいね」

耳元で囁くと、橘は唇に触れるだけの口付けをした。

さあ今日は、何をして遊んでもらおうか。橘は思考を巡らせる。

裸にエプロンをして、パイプを入れて料理している姿も可愛かったし。

その後粗相をして泣いてしまって、しかし快感に抗えず善がり続けている彼女も可愛かった。

帰って来た橘に怒られると、怯えてしゅんとしている姿も可愛かったし、その後お仕置きをされて、涙を流しながらも実際は嫌がっていない所も可愛かった。

（料理は散々だったけど……先輩が何も出来なくなったら俺は別にいいし。むしろ何も……出来なくなってしまう方がいいのにな）

快感に従順な彼女は可愛い。自分をだけ求める彼女は可愛い。

橘の一挙手一投足に気を張って、自分の行動が橘にどう思われるかを気にして。

いつだって橘が彼女の脳の中に住んでいる。自分で彼女を満たしている。（でもまだ足りない。もっとだ、もっともっと）

自分が四六時中彼女の事を考えているように、彼女を自分で埋め尽くしたい。

（……まあ焦る必要はない。ここまで待った、俺は気の長い男だから。あ

あなたの全てを手に入れるまで……じっくり、たっぷり、時間をかけて、
もっと深い愛を、育んでいきましょう？
誰にも邪魔されない、この二人だけの楽園で。

(F I N)